

Title	日本におけるポール・クローデルの受容：クローデル作品の能劇化を中心に
Sub Title	The reception of Paul Claudel in Japan : with a focus on the dramatisation of Claudel's works in Noh
Author	西野, 絢子(Nishino, Ayako)
Publisher	
Publication year	2024
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	日本におけるポール・クローデルの受容を探るため、まずはクローデル作品の能劇化について調査した。クローデルが能や日本文化の影響を受けて創作した作品を、さらに日本人が新作能にしていき、それが日仏両国で上演されていく、というクローデルと能を介した日仏往復運動を、いくつかの作品を例に分析した。 つぎに、大正期の日本におけるクローデル受容について、プロレタリア文学の父・小牧近江、新劇の父・岸田國士、農民文学の父であり仏文学者の吉江喬松の3例を取りあげて調査し、分析した。その結果、日本におけるフランス文学の受容や、大正時代の日本文学・演劇の様子を解明できたことは予想外の成果であった。 In order to study the reception of Paul Claudel in Japan, we first studied the dramatisation of Claudel's works in Noh. The works created by Claudel under the influence of Noh and Japanese culture were developed by the Japanese into new Noh plays, which were then performed in Japan and France. We then studied and analysed the reception of Claudel in Japan during the Taisho period, taking three examples: the father of proletarian literature, Komaki Omi; the father of Shingeki, Kishida Kunio; and the father of peasant literature and French literature scholar, Yoshie Takamatsu. It is therefore an unexpected achievement to be able to elucidate the reception of French literature in Japan and the state of Japanese literature and theatre during the Taisho period.
Notes	研究種目：若手研究 研究期間：2018～2023 課題番号：18K12345 研究分野：フランス文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_18K12345seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12345

研究課題名（和文）日本におけるポール・クロードルの受容-クロードル作品の能劇化を中心に-

研究課題名（英文）The reception of Paul Claudel in Japan - with a focus on the dramatisation of Claudel's works in Noh

研究代表者

西野 絢子 (NISHINO, Ayako)

慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授

研究者番号：60645828

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000 円

研究成果の概要（和文）：日本におけるポール・クロードルの受容を探るため、まずはクロードル作品の能劇化について調査した。クロードルが能や日本文化の影響を受けて創作した作品を、さらに日本人が新作能にしている、それが日仏両国で上演されていく、というクロードルと能を介した日仏往復運動を、いくつかの作品を例に分析した。

つぎに、大正期の日本におけるクロードル受容について、プロレタリア文学の父・小牧近江、新劇の父・岸田國士、農民文学の父であり仏文学者の吉江喬松の3例をとりあげて調査し、分析した。その結果、日本におけるフランス文学の受容や、大正時代の日本文学・演劇の様子を解明できたことは予想外の成果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際シンポジウムにおいて、日本語による資料を分析し（新作能の詞章や上演プログラム、大正期に出版された文学雑誌のクロードル特集号やクロードルに捧げられた日本人作家による著作等）日本におけるクロードル受容の研究成果を発表したことは、国内外の研究者に新たな問題を提起するという点で学術的意義があった。さらにジャポニズムとクロードルという新たな研究課題を発見したことも同様である。またJaponismes 2018における能のパリ公演で、プログラムや字幕に掲載される能と狂言および解説文の仏訳をフランス人の同僚と共同で行ったことは、能を介した日仏文化交流に貢献したという点で社会的意義があったと考える。

研究成果の概要（英文）：In order to study the reception of Paul Claudel in Japan, we first studied the dramatisation of Claudel's works in Noh. The works created by Claudel under the influence of Noh and Japanese culture were developed by the Japanese into new Noh plays, which were then performed in Japan and France.

We then studied and analysed the reception of Claudel in Japan during the Taisho period, taking three examples: the father of proletarian literature, Komaki Omi; the father of Shingeki, Kishida Kunio; and the father of peasant literature and French literature scholar, Yoshie Takamatsu. It is therefore an unexpected achievement to be able to elucidate the reception of French literature in Japan and the state of Japanese literature and theatre during the Taisho period.

研究分野：フランス文学

キーワード：クロードル 日仏文化交流 能 演劇 フランス文学 ジャポニズム

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「詩人大使」ポール・クローデル (1868-1955) は、外交官としてよりもむしろ文学者として日本で歓迎され、クローデル自身もまた日本とその文化を愛した。しかし彼による日本受容はカトリック的視点で抽象化した個人的なものであり、大正期の日本側のクローデル受容の実態もまた複雑で、名前だけが有名になった彼の作品を実際に読み、理解していた人は少なく、また万人がクローデル肯定派というわけでもなかった。「クローデルによる日本理解」も「日本におけるクローデル理解」も共に複雑な問題を孕んでおり、双方を個別に明確化した上で、対比させることが必要となる。

「クローデルによる日本理解」に関しては、日仏の研究者がこれまで解明を続けてきたが、「日本におけるクローデル理解」については、例えばクローデルが日本人作家・文学に与えた影響を探るなど、捉えがたい課題も含むため、前者ほど明確な見解を見いだせていない。日本人研究者により部分的な成果はあるが、フランス人研究者が検討しにくい問題もあるだけに、本研究はこの点の更なる解明を努めるべく開始された。

2. 研究の目的

第一の目的は、大正期から今日まで日本人はクローデルをどのように捉えてきたのか、という「日本人によるクローデル像」を明らかにすることである。そのうえでその反響、つまり、クローデルとその作品は日本文化・文学・芸術に影響を与えたのだろうか、という問いを解明する。もし影響があるとしたらどのようなものか、また影響がない場合は、なぜなのか、その理由を検討する。

第二の目的は、「クローデルによる日本理解」と「日本によるクローデル理解」はどのように交叉していくのか、重なる部分、差異はあるのだろうか、という問題を考察し、異文化理解及び文学・芸術の普遍性に結び付く問いに迫っていき、今後の日仏文化交流の発展への貢献をめざすことである。

3. 研究の方法

(1)通史的に大正期から今日までの日本における、クローデルに関する評論や紹介文、ジャンルごと（詩・戯曲・エッセイ・講演・書簡など）の翻訳や解説文、劇評を検討することにより、日本人がとらえたクローデル像を明らかにする。さらに、「日本人」という全体像ではなく、個別の日本人で大正期に各分野で活躍した人物におけるクローデル像、クローデル受容を明確にしていく。

(2)(1)から得られた「日本におけるクローデル」を「クローデルによる日本」と対比させるべく、まずは特に「クローデルと能」というテーマに絞り検討する。具体的には日本における「クローデルの能理解」の受容の究極の形である、日本人によるクローデル作品の能劇化に注目し、クローデルに関わる新作能のいくつかの作品を分析する。

(3)能を介した日仏演劇交流について、能作品の仏語訳の機会を得た経験をもとに考察する。

4. 研究成果

(1) 初年度の2018年は、クローデル生誕150周年と重なり、3つの国際シンポジウムで登壇する機会を得たことにより、本研究課題の要となる成果を出すことができた。まず4月に慶應義塾大学で国際シンポジウム「クローデルと日本—交叉する視線」をソルボンヌ大学と協同して企画し、海外のクローデル専門家だけでなく、演出家や能楽師、能の専門家も招いて意見を交換したことにより、現場の声を聞くことができたことが有意義であった。報告者は、クローデルと能というテーマが、大正から現在まで日仏を往復している様子について、主にクローデルの作品を題材にした新作能の分析を中心に発表した。その際、クローデルによる能理解について、新しい資料、つまり長年公開されていなかったクローデルと愛人ロザリーの書簡の中から（2017年出版）、能の記述を分析し、書簡の編纂者の誤注も指摘した（演目の日付認定を誤解し、クローデルの最初の能体験の位置付けを誤認していることへの訂正）。『羽衣』について、今まで公開されていた日記における記述と、この書簡で初めて明らかになった記述を比較し、「天女」の描写がクローデル作品における理想の女性像の系譜、つまりロザリーが投影された女性像と重なることを証明した。またその系譜はクローデルが能を意図的に翻案したオラトリオの主人公「知恵の女神」とも重なること、また能の要素の影響がみられる別のオラトリオおよびそれをもとにした新作能の中にも同じイメージが投影されていることを説明した。

5月にはシカゴ大学で行われた国際シンポジウム「クローデルの世界主義（世界統一を説くカトリック詩人）」に登壇し、日本におけるクローデルの世界主義の様相とその限界を明らかにした。彼は中国や日本の諺や古典作品を自由に摂取して彼独自のカトリック的な世界主義に組み込み、言語の壁も「神の言葉」によって超えることのできる芸術の普遍性を説いていた。大正時代、一部の日本人はそれを理解していたことが、当時出版された文学雑誌のクローデル特集号等から確認できた。その反響は現在の日本におけるクローデル受容にも響き続けていることを、アメリカのクローデル研究者に発信した。

9月にはソルボンヌ大学での国際シンポジウム「クローデルとアクチュアリティ」に登壇し、大正期の日本人にクローデルが与えた影響について全体像を示した後、特に小牧近江という日本プロレタリア文学の父との関わりに絞り、解明した。以上、いずれの国際シンポジウムでも日本語による資料（新作能の詞章や上演プログラム、大正期に出版された文学雑誌のクローデル特集号やクローデルに捧げられた日本人作家による作品集等）を材料に分析し、国外のクローデル研究者に新たな問題を提起することができた。シカゴとパリでの研究発表はフランスのガルニエ社から出版された『今日のクローデル』に掲載された（*Paul Claudel, aujourd'hui, Paris, Classiques Garnier, 2021*）

(2) 能を介した日仏演劇交流について、初年度は「Japonismes 2018（ジャポニスム 2018）」の能パリ公演（2019年2月6日－10日）にむけて、プログラムや字幕に掲載される能と狂言および解説文の仏訳をフランス人の同僚と共同で行う機会を得た。能三作品（『葵上』、『砧』、『清経』）、狂言二作品（『二人袴』、『木六駄』）を取り上げたが、この作業を通じ、能・狂言の作品理解が深まったとともに、異文化を発信するための工夫の仕方などについても学ぶことができた。

2年目の2019年および3年目の2020年は、能・狂言の仏訳作業の成果の中からいくつかの作品をとりあげ、学内紀要に共著論文で発表した。2019年は『葵上』をとりあげ、原書、現代語訳、注釈書、既存の仏訳を再検討し、この「不在の悲劇」を、文学・演劇的観点、そして「能を通じた国際交流の観点」から分析した。今回の公演では、フランス人観客が、プログラムや字幕の文字を追うために舞台上の動きに集中できない、という事態を避けるため、最低限の説明文を、場面ごとに字幕に投影する、という工夫がなされた。プログラムには全訳を掲載した。字幕用の場面ごとの説明文には、例えば、劇のト書き的要素、フランス人観客への文化的説明媒体としての役割をもたせた。また観客の注意をそらさず理解を助けるために生産的な省略を含んだ機能もある。さらに、能特有のセリフの「人称」の問題、この劇の地謡の役割も分析し、クローデルによる地謡の機能の理解も参照した。

2020年は、『砧』を取り上げ、「閨怨の響き」をテーマに、より文学的な考察を行い、古今東西の人間の普遍的な心情のドラマに迫る分析を試みた。具体的には、見捨てられた妻の愛の悲しみ、忘却への怨み、という人間の深い感情がいかに世阿弥によって能劇化されたかについて、先行研究を参照しつつ、翻訳する過程で遭遇した問題（怨みの概念、心という言葉、成仏の問題など）を含めて分析した。その結果、この戯曲が通常の夢幻能の形式におさまらない特殊な構造を持つ原因が、救いようのない怨みという作品の内的テーマと深く関わっていることが明らかになった。また、クローデル、バローによる『砧』の受容についての考察を加え、今後の能を通じた日仏交流の道筋を示すことに努めた。

仏訳作業を通じて能の海外公演自体について考察したことは、欧米における能の受容史を見直す機会ともなった。能舞台の海外での設営の問題（今回のパリ公演が初めて本物に近いものを実現し、その後の公演でもそれが保たれている）や字幕の問題（それ自体の是非から内容・分量の問題、今回の解決策の効果）など重要な点を明確にしたことにより、今後の能を通じた国際交流をすすめるために有益であったと考える。

(3) 3年目の2020年はまた、先述したパリでのクローデル生誕150周年記念シンポジウムにおける発表に日本語で改変を加え、『大正期の日本人によるポール・クローデル受容、小牧近江がみたクローデル（1）』を学内紀要に日本語論文として発表した。というのもフランス人研究者から、素材の新しさを評価されたことから、国内でもこの問題を紹介し発信すべきと考えたからである。フランス語論文では小牧の記事を仏訳せざるを得なかったが、原文で紹介し、日本語の表現における分析に踏み込むことができたことが新たな成果であった。大正期の日本におけるクローデル受容の全体像も、日本語での分析資料を提示したことで、国内研究者や読者から反応を得ることができた。

4年目の2021年は、引き続き小牧近江によるクローデル受容についての考察を発展させて、学内紀要に発表した。前回は文学者としての小牧を取り上げたが、今回は社会活動家としての小牧に焦点をあてた。小牧はシャルル・ルイ・フィリップ追悼講演会を企画・開催し、クローデルに登壇させ、その報告を「批判と行動」を標榜する自身の文芸雑誌『種蒔く人』に掲載した。この記事の分析により、小牧はブルジョワ右派と考えていたクローデルのイメージを変えたこと、また両者には「民衆のために」行動する精神が共通していることが明らかになった。それは関東大震災における亀戸事件に対する小牧とクローデルの反応（震災ルポルタージュとしての記録や、クローデルの外交文書をてがかりに）を比較分析したことでさらに明確になった。同時に、クローデルがみた当時の日本社会・日本人像も浮き彫りになったことは予期せぬ収穫であった。また、クローデルの外交文書と文学テキストを比較することで、新たなクローデル

作品の読解ができたことも有意義であった。

(4)5年目の2022年は、新劇の父である岸田國士による受容について考察し、学内の紀要に論文を発表した。岸田はクローデルを正当に評価しながらも、その作品を翻訳することはなかった。それは、クローデルの劇が、大正期の日本人は勿論、同時代のフランス人の感性からも飛躍していたからである。岸田によるクローデル受容は、大正期に岸田が執筆したフランス演劇に対する考察や紹介文、クローデルに捧げられた記念文集『ゆかり』へ掲載されたエッセイから確認できる。岸田は、コポーを理想としながら主張していた純粋演劇理論の典型を能楽にみだし、岸田自身は無意識でも、そこにクローデルの能理解と重なる部分があったことを部分的にはあるが、明らかにしたことも成果の一つである。

(5)最終年度である2023年度は「日本におけるクローデルの受容」を総括的に明らかにするために、大正期のフランス文学者・吉江喬松によるクローデル受容の問題に取り組んだ。プロレタリア文学の父・小牧近江、新劇の父・岸田國士に続き、クローデル受容に積極的に貢献した吉江は、象徴派劇詩人メーテルランク受容にも精力的に働き、メーテルランク・ブームを推進した一人でもあった。まず、吉江によるクローデル紹介をメーテルランクのそれと比較したところ、吉江の比較文学者としての才能が再認識されたが、吉江はクローデルを伝統主義者と捉えていたことが明らかになった。クローデル自身はこれを拒否していたが、当時はこの見解が支配的であった。また小牧近江が開催してクローデルを招待したシャルル・ルイ・フィリップ講演会は、吉江も協力して実現したものであり、さらに農民文学の父でもある吉江にとっては自身の意見表明に重要な機会であったことが判明した。クローデルと吉江の関係を解明するなかで、日本におけるフランス文学の受容の歴史、大正期の日本文学の動向なども確認できたことは予想外の成果であった。さらに、吉江が翻訳した、クローデルが「今日の佛国美術」について述べた記事は、これまであまり指摘されてこなかった、ジャポニズムの問題に関わることを発見した。この件は、クローデルとジャポニズムの関係という研究テーマで今後解明していく予定である。

研究期間全体を通じた成果は、第一に、日仏を往復するクローデルの貢献、つまりクローデルが日本文化の影響を受けて創作した作品が、さらに現代日本人の創作欲を刺激し新才能等をうみだし、それが日仏両国で上演される等の往復運動があることを具体的に解明し、国際的な場で発表できたことである。第二は、日本におけるクローデル受容が、小牧、岸田、吉江というジャンルの異なる大正期の文人達との関係により明らかになり、さらにジャポニズムとクローデルという新しいテーマの発見につながったことである。今後は、ジャポニズムにおけるクローデルの位置付けを探るため、ピエール・ロチ、ジュディット・ゴーチエ、アンドレ・マルロー、マルグリット・ユルスナールなど、フランス文学におけるジャポニズムを実現した作家たちとの比較分析により、クローデルの特異性をさらに探り出すことを目的に研究を続けていく。それは日仏文化交流という大きなテーマに関わり、学術的にも社会的にも意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 3件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 西野絢子	4. 巻 78 号
2. 論文標題 大正期の日本人によるポール・クロードル受容 吉江喬松によるクロードル	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学	6. 最初と最後の頁 pp59-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —
1. 著者名 西野絢子	4. 巻 76
2. 論文標題 大正期の日本人によるポール・クロードル受容 岸田國士によるクロードル	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学	6. 最初と最後の頁 45-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —
1. 著者名 西野絢子	4. 巻 121-2
2. 論文標題 大正期の日本人によるポール・クロードル受容 小牧近江がみたクロードル（2）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 芸文研究	6. 最初と最後の頁 68-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —
1. 著者名 西野絢子、クロエ・ヴィアート	4. 巻 71
2. 論文標題 Le no Kinuta, l'amer echo -Essai de traduction des pieces de no jouees a Paris lors du festival Japonismes 2018-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学	6. 最初と最後の頁 17-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 西野 絢子	4. 巻 119-2
2. 論文標題 大正期の日本によるポール・クロードル受容 小牧近江がみたクロードル（1）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 藝文研究 慶應義塾大学	6. 最初と最後の頁 100-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 Ayako Nishino, Chloe Viatte	4. 巻 70
2. 論文標題 Le no Dame Aoi-no-ue ou le drame de l'absence	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 慶應義塾大学 日吉紀要 フランス語・フランス文学	6. 最初と最後の頁 27-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Ayako NISHINO	4. 巻 67
2. 論文標題 C Claudel et le No: aller-retour entre la France et le Japon	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学	6. 最初と最後の頁 93-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 Ayako NISHINO	4. 巻 225
2. 論文標題 Paul Claudel-Japon: regards croises compte rendu	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Bulletin de la Societe Paul Claudel	6. 最初と最後の頁 122-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 西野 絢子	4. 巻 115
2. 論文標題 クロードルと日本 交叉する視線（シンポジウム報告）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 98-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 Ayako NISHINO, Didier ALEXANDRE, Haruo NISHINO, Ryoichi KANO	4. 巻 226
2. 論文標題 Claudel et Nouveau No Jeanne d'Arc Table ronde	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Bulletin de la Societe Paul Claudel	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Ayako NISHINO
2. 発表標題 Claudel devant ses contemporains japonais
3. 学会等名 Paul Claudel resolutement contemporain Universite Sorbonne（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ayako NISHINO
2. 発表標題 Le mondialisme de Claudel au Japon
3. 学会等名 Paul Claudel: The World is One / Paul Claudel: Poete de l'Unite du monde Universite Chicago（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ayako NISHINO
2. 発表標題 Claudel et le no -entre la France et le Japon
3. 学会等名 Paul Claudel-Japon: regards croises Universite Keio (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Didier Alexandre, Pascale Alexandre, Ayako Nishino, Thomas Pavel, Jean-Luc Marion, Pierre Brunel, Yvan Daniel, Claude Perez	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Classiques Garnier	5. 総ページ数 497
3. 書名 Paul Claudel, aujourd ’ hui	

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Paul Claudel-Japon: regards croises	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------